

## 日本語学の二つの話題：「日本語の方言形成過程について」および「全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開発のための予備的研究」

著者	上村 幸雄
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	269-284
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001921">http://doi.org/10.15021/00001921</a>

## 日本語学の二つの話題

「日本語の方言形成過程について」および「全言語間自動翻訳・  
自動通訳装置の開発のための予備的研究」

上村 幸雄

- |  |                                    |
|--|------------------------------------|
| 1 八重山方言から東北方言まで<br>—日本語の方言形成過程について     | 1.5 補説                             |
| 1.1 琉球語宮古八重山方言群, 奄美沖<br>縄方言群の成立の時期に関して | 2 全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開<br>発にむけての予備的研究 |
| 1.2 東北方言に関して                           | 2.1 まえおき                           |
| 1.3 縄文時代の言語について                        | 2.2 研究計画調査                         |
| 1.4 邪馬台国の所在の問題と日本語の<br>方言形成            | 2.3 補説                             |
|  | 2.4 あとがき                           |

### 1 八重山方言から東北方言まで—日本語の方言形成過程について

#### 1.1 琉球語宮古八重山方言群, 奄美沖縄方言群の成立の時期に関して

私が東京から沖縄に移ったのはちょうど25年前で、私が沖縄に移る前、琉球語方言学を学び始めてから数えると研究歴はもう45年位にもなるが、研究の当初の間は、宮古・八重山の方言は、奄美・沖縄の方言と違って、日本語の非常に古い層をまとまった形で残しているのではないかという疑いを持っていて、そういう可能性を指摘していた。しかしそういう可能性があまり無いこと、つまり奄美・沖縄諸方言群に比べて宮古・八重山方言群が系統的にみて、方言学的に非常に古い特色を特別に残しているということは無いということがその後の研究のいろんな段階で分かってきたので、この「琉球語宮古八重山方言群, 奄美沖縄方言群の成立の時期に関して」という部分では、このことに関し私がいくつかの古い論文で述べた見解の訂正を行なっている。

具体的には、動詞の「連用・終止・連体」という三つの活用形が宮古方言で同形になるのは日本語の非常に古い特色を残しているからなのではなく、音韻変化の激しいこの方言でのちに起きた類推変化によるものであることや、ワ行の子音 /w/ が宮古・八重山方言群で /b/ になること、ヤ行の子音 /j/ が与那国方言で /d/ になることも日本語の大変古い特徴の残存なのではなく、新しい変化の結果であることが判明したことなどである。

さらに琉球語は、北琉球語、すなわち奄美沖縄方言群と、南琉球語、すなわち宮古八

重山方言群とにまず二分されるが、その分かれないうまとまりの全体としての琉球語が、いつごろから琉球列島で使われるようになったのかという問題について、これはまだよくは分かっていない問題とはいいながら、今までのところの私の見解をまとめて述べた。

そしてこの問題について私がこの論文であらたに付け加えたことは、琉球列島の中でも、波照間島とか、与那国島など、宮古・八重山方言群の使用地域の中でも本土から非常に離れた場所にある島が琉球語化されたのは、奄美などよりかなり新しい時期であるという可能性を十分考えておかなければならない、ということであった。

## 1.2 東北方言に関して

次に、2番目の部分「東北方言に関して」では、この論文が八重山出身でのち東北方言をよく実地調査して回った宮良當壯を記念して書いた論文であった関係で、東北方言に関して、東北方言というのが実は本土の方言の中では比較的新しい方言であるという風に考えなければならず、東北地方全体が日本語化されるのには非常に長い時間がかかったというようなことを、アイヌ・エミシ系の言語を話していたであろう人々との関連の中で述べた。そして、これに関連して未解決な問題としては、東北地方がアイヌ語・エミシ系言語の使われていた地帯であったということはすでに明らかなことであるけれども、それを詳細に明らかにした山田秀三先生が亡くなられて以後、そのさらに南の方に確実なアイヌ語（アイヌ語・エミシ系言語）の地名がどれだけあるかという問題はまだ未解決だということを述べた。

しかしその一方、この論文のテーマと関連しながらこの論文では全く取り上げなかった事柄として、以下のことがあることをここであらたに付け加えておきたい。すなわち日本語の方言の形成過程、そして方言の個々の語彙、あるいは日本の地名について今後更に詳しく調べていくためには、アイヌ語との関連の解明も必要でたいへん大切であるが、弥生時代以後も、奈良時代くらいまでの間に、非常にたくさんの朝鮮半島からの渡来人、後に「帰化人」という言葉で呼ばれている、渡来人がやって来て、その人達が日本語の語彙の形成にどういった寄与をしてきたのかということ、およびそれに関連してもう一つ、膨大な量の朝鮮半島系の地名が実は日本中にあると推定されるけれども、それはほとんどの専門的な言語学者や方言学者の関心の外にあり続けてきたということである。

さらにこのほかにもまだ面白い未解決のこれからの問題が沢山あるが、そういう問題の一つとして、私が非常に深い関心を持ちながら、自分の力では何ともできなかったことに、日本語の中におけるオーストロネシア系言語の要素というのが、確実な形でどういう風にあるのかということがある。それは、この科研費の代表者で、ここにおいで

崎山理先生が最もふかく関わっておられる問題であり、さらにそれ以前には、亡くなられた泉井久之助先生や、それから村山七郎先生などの諸業績もあり、それから崎山さんがいろんなところで少しずつ、日本語におけるオーストロネシア語の影響の問題について非常に貴重な指摘をなさってきていらっしゃるにもかかわらず、なにせ私がオーストロネシア語についてほとんど何の知識も持っていないために、それについて論じる資格がなく、私にとってはこれから勉強して解決すべき問題として残ってしまっていて、私の世代はやはり「危機に瀕する言語」としての琉球語の記述だけに追われてしまい、日本語そのものの形成にとって非常に重要かとおもわれる大変に面白いこの問題にとうとう立ち入らないままで終わりになってしまいそうなので、残念ながらこの問題についてもこの論文では触れていない。

ついでにこの部分では、第二次大戦後、民間の学問ではなくなってアカデミズム化して大学の学問となってしまった日本の方言研究者の多くが、方言が次々に変容し消滅していく現代という時期にあって、言語の構造についての狭い興味に閉じ込められ、方法論も粗雑な段階にとどまっているということ指摘したが、これに関してはあとで触れる。

### 1.3 縄文時代の言語について

それから3番目「縄文時代の言語について」という章では、これまで私が日本語の方言の展開に関して、弥生時代以降のことばかりについて述べてきて、縄文時代の言語について一切何も言ってこなかったことについて、小泉保先生から先生の『縄文語の誕生』(1998, 青土社)という本でご批判を頂いて、同時に小泉先生からこの本も頂戴したので、先生の縄文時代の言語についてのお考えと私の今のところの考えとの違いをまとめて述べた。

小泉先生は、縄文の少なくとも末期にあった言語が地方の方言的な特徴をそのまま保ちながら弥生時代にも受け継がれていて、日本語は基本的には縄文時代以来の言語であるという風にお考えであるのに対して、私にはどうもそういう風には考えられないこと、当面、小泉説が正しいか、私の考えの方が正しいかは、今の言語学の伝統的な方法だけでは、つまり比較言語学の比較再建とか、あるいは内的再建などといった方法だけではなかなか解決できない難しい問題が絡んでいるけれども、しかし私は、何となく縄文時代という時代は少なくとも日本列島全体が日本語という、単一の言語に統一されるような、社会的な条件が無かつただろうという風にかんがえざるを得ず、弥生時代になって初めて日本列島では言語が統一されるという社会的な条件が生まれてくるのだ、という風にみる私の考えを述べた。

#### 1.4 邪馬台国の所在の問題と日本語の方言形成

その次の4番目「邪馬台国の所在の問題と日本語の方言形成」では、これは邪馬台国が九州にあったのか、それとも近畿地方にあったのかということで、日本語の方言の形成、発展のプロセスも、少なくとも初期の段階で大きく違ってくるといふ風に考えられるので、どちらが正しいであろうかということに昔から関心を持ってはきたけれども、今、私が見るところ、九州説はもう成立する余地がほとんど無くなってしまっていて、近畿説が正しいといふ風に見て間違いないと判断せざるを得ないことを述べた。そういう判断に至ったのは、最近の考古学の大きな、そしてさまざまな進歩の中で、特に年輪年代学という新しい方法の登場によって、古墳時代の始まりが100年以上も繰り上げることができるなどの事実が明らかになってきたことによっている。そうすると日本語の諸方言を収束していく中心が、非常に早い時代から近畿地方にあったということになり、そのことと日本語の方言を大きく分けたばあいの東日本方言と西日本方言の対立という現象とをどういふ風に結び付けて考えたらいいのかという問題が浮かび上がってくる。そして邪馬台国が大和であるという前提に立てば、いったいどういふシナリオが描けるのかということであらためて問題としなければならなくなる。

#### 1.5 補説

この論文はいずれも私が長い間の琉球語研究で解決の出来なかった問題を、私の憶測としてここにまとめて述べたというような感じのものであり、今後の研究のための問題点の整理といった意味の方が大きいかといふ風に思うが、その中で、私は長いこと沖縄にいて、本土の方言学のありかたに対して多少の不満を持ちつづけてきたので、そのことにちょっとここでも触れておきたい。本当は今日の方言学のどこが悪いんだということをもう少し厳密に具体的に書いて批判をしなければいけないが、詳しい批判を展開するのは非常に時間を要するし、それよりも自分の研究に専念した方がはるかに能率的で、結局はいい批判ができ上がるということもあるので、これまでこうした批判はしてこなかったが、たまたま2000年の11月25日に京都で行った私の「日本の危機に瀕する言語」の講演の中で、アイヌ語と琉球語の問題を取り上げながら、同時に日本語の問題を取り上げたにもかかわらず、そこでの時間の関係上、日本語の諸方言の問題は脇に置いて、全然話題にしなかった。たまたま東京大学の上野善道さんが私の講演へのコメント(宮岡伯人・崎山理 編『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店、2002所収)でその問題に触れてくださって、私が言いたかったことの半分くらいは言ってくださった。しかしこの論文にも述べた次の諸点を、ここでもう少しだけ強調しておきたい。

論文では、日本の本土の歴史方言学と言語地理学にさして進展がないことは、「一方では国立国語研究所の言語地図を含め、日本の言語地理学がこれまでに解決しえた比較

歴史方言学上の成果が意外なほどまだちいさいということ、そしてW・グロータス、柴田武、徳川宗賢など、日本の代表的な言語地理学者とされてきた人々とその後継者たちの研究の理論的、方法論的な水準の問題、歴史に対する関心の範囲、程度の問題、また平山輝男をはじめとする日本の代表的な記述的な方言学の研究者たちの持つ方法論の一般的な粗雑さ、さらには日本における方言学、特に第二次大戦後の方言学と、口承文芸学、史学、民族学、さらには古典文学研究などとの不毛な乖離した関係、建前はともかく、実際には学派よりも学閥の論理を優先させる、第二次大戦後の大衆化した大学での、在野の学問ではなくなってしまったアカデミズム方言学が全体としてかかえている問題とじつはかかっている」(同論文の17, 18ページ)と述べている。

そのうちまず言語地理学に関していえば、まだ日本では、国立国語研究所などで言語地理学的調査が本格的に始まった頃には、既にドーザ (A. Dauzat) の『言語地理学』は翻訳されており、そして国語研究所の計画に最初から参画したグロータス神父は、そのお父さんもヨーロッパで言語地理学者だった関係で、言語地理学に詳しく、かつ常識のある言語学者ではあったけれども、ドーザが達成した以後の言語地理学そのものに理論的な進歩をもたらしたかという点、どうもそういう風には思えず、日本で言語地理学的調査が本格的に開始されたのは1955年くらいからであるが、その頃の、私が国語研究所で同室していた親しい上司や仲間であった柴田さんや徳川さんなども、私の見るところ、ほとんどまだ何の理論的な洞察を生み出せるような研究の段階には至っておらず、ヨーロッパの模倣といった程度の、理論的にはまだ何も無かった段階から始まって、そして最初230項目の言語地理学の調査を、準備に2年、調査に8年かけて行なったものが、それが唯一日本の大規模な言語地理学となって、それで終わりになってしまった。私は計画にも調査にも部分的に協力をしながらも、横でずっとこの経過を見てきたが、そこには、調査項目の選択の問題から始まって、いろんな問題が最初からあった。またあの当時全国で調査を分担した方言学者たち、すなわち国立国語研究所の地方調査員(のち地方研究員と改称)の人々の多くがまだIPAを使いこなすことができなかつたし、アクセントの観察なども苦手とした方もいらしたために調査対象が大きく制約された。その後地方研究員もだんだん若返りしてきたが、しかし、日本の言語地理学は、調査としてはこの8年の調査で終わりになってしまった。私はこの調査が終わった時、整理は後回しにして2次、3次の言語地理学をやるべきだということを、先年なくなった徳川君にかつて言ったことがあり、もうその時柴田さんは転出していて、この仕事全体の責任者だった徳川君は、今までの調査の整理がやはり先決だとの主張を変えなかつた。そしてその整理のために国立国語研究所に入られた方々、真田信治さん、佐藤亮一さん、加藤正信さんなど、今では日本の方言学の長老になった方々をはじめとする多くの方々が整理を担当なさって、整理に10年をかけた。たくさんのカードを手作業で分類して、

白地図にゴム印を押したり、シールを貼ったりして、すべてを手作業で整理しなければならなかったために、膨大な時間と人力を食ってしまった。もし、今あれと同じ整理をやれば、あれの10分の1あるいはそれ以下の時間でできたに違いない。まあその意味で対照的に、私たちは沖縄で1980年から琉球列島全体のすべての伝統的な集落880地点を対象に、300項目ほどの言語地理学的調査を10年ぐらいをかけてやりおえて、現在その整理をしているが、今だから非常に高速に、能率的に整理ができるわけで、そういう時代まで放っておいても、方言学などの学問の進歩というのはそれほどゆっくりしたものなのだから、大丈夫だった。どうもそこらへんの作戦を日本の言語地理学は全体として誤ってしまったのではないかと私はかねがね思ってきた。私も目下琉球語方言学から足を洗いつつあって、私の後継者は琉球大学の狩俣繁久さんたちであり、狩俣さんのところで言語地理学の整理の仕事が今ちょうど進んでおり、その成果はこれからも皆様にいるんな機会にお見せすることができると思うが、昔の人が大変に苦勞して、大きな時間のロスをして作った地図を、今では情報処理技術の進歩によって何でもなく作れてしまう。また、言語地理学とはどういう方法論とパースペクティブを持って調査票などを作らなければならないかというような言語地理学上の基本的な問題も、琉球列島の言語地図が公表されていく中で、失敗や成功の例をとりまぜてこれから結論が出てくるのではないかと思っている。

それからもう一つ、記述言語学の方法論のレベルの問題に関しては、平山輝男という1人の名前だけを挙げて、日本の記述的な方言学の仕事の荒っぽさについて述べたけれども、ここは別に平山輝男でなくても、たとえば柴田武でもいいわけだが、業績の量からみて、第二次大戦後の日本を代表する中央の方言学者としては平山を例にあげるのが一番適当だろうということにすぎない。しかし彼の膨大な仕事の中の、そして彼のおおくの弟子たちを含め、他のおおくの方言学者たちの仕事の、ここがいけないのだということを経験を改めてもう少し厳密に、具体的かつ明白に述べた方がいいかと思う。

それと、現代という時代には、言語が急速に変化しているので、全体としてはやはり、必要な時期に必要な研究を推進して、急がないことは後に延ばすとか、いろいろ研究のタイミングの取り方というのが非常に大切である。日本の方言学は、全体として見れば、戦後非常に盛んになったといえるけれども、言語地理学のようなばあい、ちょっとこの点で失敗したというふうには私は見ている。その後、国立国語研究所は文法の言語地図（『方言文法全国地図』）にとりくんだが、文法をやるよりも語彙をもっとたくさんやるべきであったと私はおもう。文法現象も言語地理学の対象の一部にはできるけれども、国立国語研究所の『日本言語地図』の語彙の項目数230というのは、数の点でも項目の内容の点でもいかに少なすぎると思わざるを得ない。しかし言語地理学的調査をかつてのように日本全国で効率的に行えた時代はもはやとうに過ぎ去っている。

## 2 全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開発にむけての予備的研究

### 2.1 まえおき

もう一つの話題は「全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開発にむけての予備的研究」というもので、これまた人に笑われそうな話題であるが、お配りしたものは科研費の申請書に書いた文章をそのままコピーして持ってきただけのもので、科研費の審査には落ちるかもしれない。やはり11月の京都での「日本の危機に瀕する言語」という講演のときに私がわざわざ日本語を問題にした一つの理由が、滅びない安全な言語もやはり皆危機にあって、その危機とはどういうことなのかということをも明らかにすることにあった。(のち、この講演原稿とそれへのM. クラウス、上野善道のコメント、そしてそれに対する上村の回答はさきに述べた宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語』所収) この問題についてはもう少しわしく触れたかったので、もう一つ、雑誌『国文学 解釈と鑑賞』の今年の1月号に「21世紀の日本語」(2000年12月、至文堂)という文章を書いて、そこでもほぼ同じ趣旨を述べた。こういう装置を開発するということが今や技術の進歩によって可能になりつつあって、それは日本のような国で推進すべきであるという風に、私は勝手に思い込んでいる。

いや、おそらく私だけが思い込んでいるのではなく、たとえば昨日、実はこちらにお招きいただいたついでにATRの音声言語通信研究所を訪問して、その自動通訳装置の開発状況を見学してきたが、今そこで開発しているのは、会議場やホテルの予約業務に関する日本語と英語の同時通訳装置で、それがほとんど実用に近い段階にまで来ており、そういう限られた狭い分野で方法論を磨きながら、それを将来は沢山の言語に、そして広い分野に広げていこうというのがあそこの研究の究極の目標であるらしく、その社長の山本誠一さんもやはり高い目標を持っておられるようにお見受けした。

日本にはそういった研究ができるような条件ができていて、そういう研究を推進させることが、世界における英語の一人勝ちを防ぎ、かつ各民族の言語と文化が平等に発展していく余地を残すということに大変深く関わっているだろうと考えて書いたものが私のこの予備的な研究の研究計画書である。今ごろこうした研究を、私がこの歳になってから始めようと言えば、皆に笑われるだろうけれども、笑わないで下さいというわけにもいかず、まあ笑われてもいいと思って書いた。

しかもこれは私が日ごろ大いに苦手としているコンピュータに関わっているので、私には余計苦手なことではあるからなおさらである。しかし、ひとつ大切なこととしてここで指摘したいことは、諸言語の音声、文字はもちろん、語彙や文法の非常に細かな、優れた研究なしには、こういう研究は進まないということである。だからそういうものを推進させる上で、言語学者はやはり大きな責任を負っていると私は思う。そしてその



一方で、細かな文法的意味、例えば動詞のテンスとか、あるいは名詞の対格とかが、日本語で現実の世界の間のどういう関係を表しているのかとか、そういった文法に関する詳細な研究は、実は日本で非常に進んでいるが、それが一般にはほとんど知られていないと私は思っている。またここで、20世紀前半の構造言語学と、後半の生成文法と認知言語学とについて、一まとめにして悪口を言っているけれども、しかし、実は生成文法も認知言語学も、自動翻訳装置などということを頭の中では描きながら登場してきた言語学であるのに、中身があまり伴っていないというだけの話なのである。

私はやはり言語学者なので、今は方言学や音声学の分野にやや特化してしまっているものの、かつての大学での卒業論文は意味の研究であったし、それから文法にも大いに興味があり、私としては目下脇道に逸れていっているが、それを元へもどしたい気持ちである。今から30年ほど前、亡くなられた服部四郎先生が、英語教育協議会という組織の中で小さな研究グループを作って、そのメンバーは服部先生と、当時東大におられた長谷川欣裕さん、後に東大に行かれた国広哲也さんと私の4人であったが、私は服部先生に、日本語の基礎語彙を研究してくださいと言われ、それは非常に面白い研究テーマだったけれども、その当時の私にはそのひまが無かったし、それに私の考えている方法論では、当時としてはちょっと研究ができなかった。したがって服部先生には申し訳ないことながら、何もできないままになってしまった。このとき、国広さんは意味論関係の本を何冊かお書きになったけれども。また文法に関してもちょうど東京外大のA・A研で文法の調査票を作るための研究会があって、その研究会の委員として委嘱を受けたりしたが、それも会議に数回出席しただけで、言語学者としては、元々取り組みたかったテーマであったのに、そこでも何もしなかった。

世界中に6千ほどの言語があるとして、その自動翻訳というのは、この言語とこの言語、この言語とこの言語という風に、個別の言語間を考える場合に、その中間に、よく「中間言語」あるいは「媒介言語」などという言葉があるが、中間言語ではなく、私はスーパー・ランゲージあるいは「超言語」という方がいいと思っているけれども、そういう中間の媒体を置かないと多言語間の能率的な自動翻訳は出来ないだろうという風に考える。そしてそれは一体何なのだろうかということを、少しまともに考えてみたい。今から考えられるかどうか、ちょっと分からないけれども、ともかく、昔から考えたかったことなので、この際、失敗して元々、皆さんから笑われるだけだということで、始めようと思っている。

多分、このテーマは宮岡伯人先生が代表者をなさっていらっしゃる「危機に瀕した言語」の研究班の中の方法論に関する班のテーマと重なる問題で、世界中のどんな言語でも対象にできる調査票を作るというような、また極めてフレキシブルで、自由に改訂・増補ができ、そしてそこを通り過ぎることによって、あらゆる言語を非常に有効に記述

できるといったような、そういうモデルというものがどうあるべきかについては、世界中でいろいろ理屈は言われているようであるけれども、しかし私の見るところ、個々の言語的事実についての非常に細かな、具体的な研究というのはあまり無い。例えば日本語の「立つ」というひとつの動詞を研究する場合に、「人間が二本足で立つ」というのが「立つ」の基本的な意味であるが、「立つ」には様々な、「席を立った」とか、「大阪を立った」とか、「建物が立った」、「波が立った」、「うわさが立った」など、非常に様々な多義の「立つ」の意味があるわけで、多義の意味の中のどの意味が特定の文の中で、特定のコンテキストの中で、あるいは特定の場とのかかわりの中で、実現するのかということについて研究することは、今はコーパス言語学などという言葉が出てきているが、まとまったデータベースを用いて、様々な語彙、文法、慣用句などについていちいちその言語的事実を確認し分類し、相互関係を研究できるという条件がある時に初めて可能なのであって、しかも、1人ではできない。1人で研究するには「立つ」というひとつの動詞だけでさえ、恐らく有効なコーパスを使ったとしても、3ヶ月くらいはかかき、非常に難しい単語や文法現象だったら1年はかかる。しかし、言語の基礎的な語彙とか、基礎的な文法的なカテゴリーとか、諸言語によって相互に非常に違うものというのは、そんなに沢山、何万もあるものではなくて、何百か、あるいは千をちょっと越える程度しかないのではないかと見られるので、必要な数の人間と必要な言語学の方法さえあれば片付く問題だという風に私は思っている。私はそのモデル作りみたいなことをやれればと考えている。やれなかったら皆さんに笑われるだろうけれども。

以下は2001年度（平成13年度）の文部省科学研究費補助金（基礎研究（c））の研究計画調査書として前記の課題のために執筆し提出した文章である。（やや詳しい趣旨は前掲の二つの論文を参照。）

## 2.2 研究計画調査書

研究課題：全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開発にむけての予備的研究

研究目的：21世紀において、国際共通語として英語のみが機能するという英語のひとり勝ちの状態を回避し、あらゆる民族のあらゆる言語、そして言語文化の平等で自由な発達を保障するためには、いつでも、どこでも、どのような言語からどのような言語へも、即時に、あるいはきわめて短時間に、情報（音声情報、文字情報）が変換されることを可能にする装置、しかも安価で小型の、持ち運び可能な装置の開発が必要不可欠と思われる。

そしてそのような装置の開発を可能にするためには、大きくわけて二つの条件が前提となる。その第1の条件とは情報処理、情報通信技術のさらなる進歩であり、第2の条

件とは言語学のおおぼな進歩である。そしてそのうち第1の条件に関しては、進歩が十分に期待でき、技術的には障害が見当たらない。そしてこの第1の条件の実現に関しては、さいわいにも、日本は国際的にみて現在もっともめぐまれた条件を具備していると判断される。(ただし、電磁波の生体におよぼす悪影響の問題とか、そのような技術の、特定の国家、あるいは集団による独占、あるいはそのような目的をもつ装置の自由な技術開発に対する、特定の国家あるいは集団による妨害、破壊工作といった阻害要因の発生には十分に配慮する必要がある。)

一方、第2の条件に関しては問題はそう簡単ではない。20世紀前半の世界の言語学を代表する構造言語学、そして後半のそれを代表する生成文法理論と認知言語学とは、まだ大まかな仮説を提出しているに過ぎず、研究の実質的な中身は以外にとほしく、科学としてはまだまだ未成熟だからである。上のような目的をもった装置の開発には、その前提として、日本人にとっての母国語である日本語はもちろんのこと、あらゆる言語に関してその音声、文字、語彙、文法に関して詳細で具体的な言語学的研究がどうしても必要であり、諸言語についてのそのような大規模な研究が比較可能な高いレベルの方法論をもっておこなわれなければならない、それには膨大な人的エネルギーと時間とが今後必要となるからである。しかしこれに関しても、実は日本はもっともめぐまれた有利な立場にある。それは第1に、理論上はともかくとして、実際には自動翻訳の技術は日本語と英語に関してではあるが事実上日本がもっとも進んでおり、第2に、世界に対してはもちろんのこと、日本国内でも研究者間にあまり知られてはいないものの、上の目的に役立つ言語の詳細で具体的な研究は実は現代日本語を対象としつつ、日本において方法論的にもっとも進んでいるというめぐまれた条件があるのである。

- ① この研究は、いかにすれば上の目的をもった開発研究を日本で速やかにスタートさせることができるかを、2年以内に明らかにすることを目的とする。
- ② このような装置の開発は21世紀の世界諸民族の平和と共生のために、そして南北問題の解決のためにはかり知れないおおきな意味をもつことは明らかである。またこのような装置の開発は、国際共通語としての英語の独占をふせぎ、それによって生ずる英語国民と非英語国民との間の国際的不平等、そして英語を習熟した人とそうでない人の間の国内的不平等の解消におおきく貢献する。さらにこの装置の開発は同時に計算機の上でのみ働き、電磁力を媒介とした2進法の国際共通語を開発することをも意味する。また同時にその開発は、音韻論、文字論、語彙論、文法論、テキスト論、詩学、翻訳論など、言語学の多くの分野の進歩を刺激して、言語学そのものの進歩をうながす。またこの装置が、過去の言語、また21世紀中に滅亡が予測されている、いわゆる「危機に瀕する言語」をも対象にできることに注目する必要

がある。たとえばサンスクリット語でかかれた古代インドの聖典ヴェーダの言語、あるいはアイヌのユーカラを、その音声を機械から耳にしながら、世界中の人がそれを任意の言語への翻訳によって鑑賞するといったようなことを可能にする。

- ③ 日本語と英語との2言語間の機械翻訳とか、日本語と英語との、目的を限定した自動通訳装置（たとえば会議場、ホテルなどの予約業務、音声や文字、図形の認識や合成など）の開発は日本ですすでにおこなわれており、その水準は世界的にみて低くない。それゆえそれらの研究によって得られた技術的成果はこの装置の開発にもおおきくやくだつ。しかし、世界中のあらゆる言語、あらゆる種類の文字を対象にした自動翻訳・自動通訳装置の開発に関する研究はべつの次元のあらたな言語学上の、未解決なおおきな課題をかかえており、そのような研究が理論上の遊戯としてではなく、実際に実用をめざしたものであるかどうかは、日本国内についても、世界についてもわたしの管見にはいってこない。

おおきな人員、費用、研究組織を必要とする実際の開発研究をできるだけはやい機会に日本で開始できるよう、方法論上の見通しをうることが日本のためにも世界のためにも必要であるとかんがえ、この研究を立案した。

従来の研究経過・研究成果又は準備状況等：この研究の申請者はこれまでおもにフィールドの記述言語学（主として琉球語方言学）と音声学（主として実験音声学）に長年従事しながら、一般言語学、言語教育、そして日本の国語国字問題、国際共通語の問題、世界の環境問題・南北問題の一部としての「危機に瀕する言語の問題」などに大きな関心をいだきつづけ、またこれにかかわる種々の開発研究（音声の合成、認識、機械翻訳、その他情報処理一般）や医学的な研究の進捗状況を注意深くみまもってきたつもりである。

国立国語研究所を辞して沖縄に居をうつしてから25年目になるが、危機に瀕する言語としての琉球語の研究、記録、保存の長期的な共同研究（これまで数回の科学研究費、主として総合研究と特定研究を受けている）が研究者のおおきな協力によって、所期の、そして予期した以上の成果をあげ、かつ多数の後継者も養成してきた。自身としてはこの仕事が一段落したので、本来もっとも関心のふかかった言語問題、言語教育問題へと研究対象を転換できる時期がようやく到来したと感じている。国語教育の問題にしても、外国語教育の問題にしても同様であるが、小渕前首相時代に提唱された英語を第二公用語とする考えに端的にあらわれているように、国際共通語の問題も、将来をみすえて問題を多角的に、そして専門家としての的確かつ詳細に捉えている研究者が残念ながら日本にはたいへんすくないと申請者には感じられるので、あえてこのような研究の申請にふみきった。研究目的研究計画の欄にしるしたことで明らかなように、英語と競争

する意味では、この研究は欧米よりもむしろ、日本をふくめてそれ以外の国々、特に欧米にくらべて弱小な国家、民族におおきな利益をもたらす、その意味では21世紀早々、緊急を要する研究課題であるが、まだ研究としては萌芽的な段階にあるといわねばならず、試験的な研究といえどもすぐに共同研究を立ち上げられる段階にはなく、そのような段階に至るための準備をすることのみに研究目的を限定して、とりあえず申請者ひとりの責任において研究を申請することとした次第である。

#### 研究計画・方法：

##### 〈13年度〉

関連するさまざまな分野の研究者、専門家に個別に面談して、議論と情報交換をおこない、その意見を集約することに研究の第1年度をあてる。

その分野別の研究者、専門家とは、ほぼ以下のとおり。

- (1) 日本語学をはじめとする個別言語学の、もしくは言語学の個別分野のすぐれた研究者
- (2) 音声・文字・図形の合成、認識などの専門家
- (3) 機械翻訳開発の専門家
- (4) ソフト開発のすぐれた技術者、専門家
- (5) 関連するメーカーの経営者、企業家
- (6) 哲学者、未来学者など関連する分野の専門家など、

##### 〈14年度〉

第1年度で得られた知見をもとに、本格的な開発研究に必要な以下の条件を整理し、あきらかにして、なすべき研究のその大まかなデザインを描き、これを私見としてまとめて報告する。

- (1) どのような装置（機能、おおきさ、価格などをことにする複数の装置）を開発すべきなのか
- (2) そのためにどのような言語学的研究が日本において必要であるか？
- (3) 開発の短期、長期の年次計画
- (4) 開発に必要な研究組織のありかた、必要な人員
- (5) 開発主体はどうあるべきか、開発の費用と調達方法はどうあるべきか？
- (6) 開発に必要な研究者の養成プログラムをどのようにたてるか？
- (7) 開発にはどのような国際協力が必要で、かつ望ましいか？
- (8) 初期の開発段階で開発の対象とする言語の選択（現在世界にある6,000といわれる言語のうち、どれに優先順位を与えて開発研究の対象とするか？）

(9) このような装置の開発の必要をいかにして人々に認識してもらうか？

### 2.3 補説

研究会の当日時間の関係でお話できなかったことを私の考えをご理解いただく参考までにここに少々述べておきたい。

たとえば岩波書店から出された『日本語語彙体系』(1997)は自動翻訳をめざすNTTコミュニケーション研究所の人々の力作であるが、言語学のしろうとがよくここまで研究したといろいろと感心させられる面がある一方で、しろうとでは到底越えることのできない方法論上の巨大な壁にぶつかってしまっているという印象をぬぐいざることができない。なぜなら、そこには論理主義と、置き換え、そして「話し手の直観」にたよるきるチョムスキー言語学などの言語学としてはきわめて初歩的な意味分析、構文分析の方法しか見当たらないからである。ところでチョムスキーにとっては「話し手の直観」は伝家の宝刀のようなもっとも大切な分析の手段であるが、われわれにとって「話し手の直観」は、あまり当てにできない研究の手がかりであると同時に、研究対象のもっとも重要な一部である。これは生成音韻論においてフォネムや弁別の特徴が演繹的な理論の展開の出発点であるのに対して、われわれにとって、それが最も重要な研究対象そのものの一部分であることとも共通する。私によれば「話し手の直観」やフォネム、弁別の特徴などをそのまま分析の手段として使う限り、研究はかならず巨大な壁にぶち当たらざるを得ない。それは記号とそれが表わす現実との関係の分析を話し手の意識のレベルにとどめて科学のレベルに立ち入ることを避けることになるからだ。いや、別の言い方をすれば、それは言語の研究をしないこと、もしくは低レベルの研究で満足すること、あるいは研究をする振りをし、もしくは研究しているつもりになることに限りなく近づく。

20世紀の半ばころの言語学における構造主義から生成文法への転換は、けっして言われているようなコペルニクスの転回などではなく、実は論理的な必然、あるいは流行の哲学的思潮の論理的な帰結なのであって、生成文法論は実はヨーロッパとアメリカの構造主義の「構造」というものについての、ソシュール、トゥルベツコイ、ヤコブソンなどの、美しいがあまりにも単純な見方を、正確にはその優れた点ではなく、弱点といわなければならない致命的欠陥の部分のまま、負の遺産としてすっかり相続してしまっているのである。音声の認識の問題を含めて、自動翻訳、自動通訳の開発が一時期の多大な投資にもかかわらず、多義性を排除することが特徴である専門用語のみからなる科学技術関係の文書の下記に役立つレベルに達することはできても、その先で大きな壁にぶち当たらざるを得ないとすれば、こうしてその原因は現在少なくない数の言語研究者にもてはやされている言語学そのものの理論的、方法論的な弱点の中にある。

そして日本では、日本語を対象とする言語学（別名、国語学）は橋本進吉の文法理論が文部省から公認された学校文法として、もしくは標準的な文法として権威づけられるようになった1930年代から、世界の言語学と軌を一にしながら文法を不毛なものにして、今日にいたるまで長期にわたって日本語を使う国民に長い目で見とおおきな不利益を与え続けることとなったのであるが、20世紀の世界の言語学の潮流はこの日本の不幸を救い出す手立てとはならなかったのだ。そしてそれは両者が文法を現実世界から切り離す、演繹的な、もしくは循環論理的な形式主義的理論であるという点で共通の特徴を持つゆえである。私が研究目的のところで「第2の条件（すなわち、言語学のおおはばな進歩）に関しては問題はそう簡単ではない。」と書いたのはまさにこのような、世界と日本の言語学の事情をさしている。このような言語学上の傾向は個別言語の研究そのものを貧相にするばかりでなく、応用言語学において、すなわち一方では言語教育の面で、もう一方では自動翻訳などといった高度なレベルの言語情報処理の面でマイナス要因としておおきく働かざるを得ないのである。

## 2.4 あとがき

この会合の数ヵ月後、2001年度のはじめごろ、日本学術振興会から親展と記された次のような通知を大学を通じて受けとった。

そしてAとBのところを横線で消してあった。すなわち、私のお話した研究課題は日本学術振興会研究費委員会によって「C（中位程度未満の課題）」に該当すると評価され、採用とはならなかったことをここに「謹んで」報告しておきたい。

私はここでお話したふたつの話題のうちの第1の話題に関連する研究にその後のおおくの時間を費やしたため、この課題に関してはこの1年あまりの間、さして時間をさけず、採用にならなかったことがかえって昨今の私にはさいわいした。しかし私が関わろうと関わるまいと、上記の研究計画は非常に重要なものであるという私の考えは変わっていないので、私の立案した研究計画に対する「中位程度未満の課題」と日本学術振興会科学研究費委員会が評価を下したことに興味を感じている。この評価自身は審査を委嘱された日本言語学会、もしくは日本音声学会に所属する特定の中堅研究者の判断に基づくものであろうが、長年にわたって日本の教育を沈降（振興ではない）させ、荒廃に導いた文部省（現在、文部科学省）の天下り機関のひとつである日本学術振興会が、私にとっては、研究目的のところで「特定の国家あるいは集団による妨害、破壊工作といった阻害要因の発生には十分に配慮する必要がある」と述べたことに類する研究に水を差す出来事を引き起こした事実上最初の集団となったことは、よく考えてみればなるほど当然とはいいいながら、思わず吹き出してしまうような出来事であった。しかし笑ってばかりもいられないので、ここでは私の立案した研究計画に関し

38002

沖縄大学 人文学部・教授

上村 幸雄 殿

50000401

親展

日本学術振興会研究事業部研究助成課

49944

研究種目名 基盤研究 (c) 一般

分科細目名 248言語学・音声学

研究課題名 全言語間自動翻訳・自動通訳装置の開発にむけての予備的研究

上記の申請課題は、審査の結果、採択されませんでした。

採択された課題を含めた全申請課題のうち、あなたの申請された細目（又は分科）での課題の第1段審査評点のおよその順位は以下の通りでした。基盤研究は二段審査制をとっていることから、第1段審査の評点が良くても採択にならない場合がありますので、ご承知おきください。

本年度、基盤研究（c）一般（文学）の申請課題は2,445件、採択課題は631件でした。

なお、本件についてのご質問、ご照会には応じかねますので、ご了承ください。

- A (採択課題に準ずる程度)
- B (中位程度以内の課題で「A 以外」)
- C (中位程度未満の課題)

日本学術振興会科学研究費委員会

て、および、これに対する日本学術振興会がお下しあそばされたありがたいご評価について、なるべく多くの言語研究者から忌憚の無いご意見を伺いたいと思う。そのことをこの誌面をお借りしてお願いして筆を置く。

なお、私は2003年3月に大学を退職する関係で、この研究計画（2年計画）を翌年は申請しなかった。日々の教育の仕事から解放されてやっと研究に専念できる身分になる時に、大学教授でなくなる私は、幸か不幸か、文部科学省の規定により、同省の科学研究費を申請する資格を与えられていない多くの研究者たちの仲間入りをあらたにすることになるので、はい、さようならということになるのである。文部科学省の科学研究費補助金の制度は、その応募資格、審査方法、そして運用の多くの点でこれまでの私のいくつかの経験からみて、公開の論議を経た上で改善すべきさまざまな問題がありすぎるほどにあると思われるが、今それを論ずるいとまはない。しかし、もしお暇があれば、ネットで同会のホームページ（<http://www.jsps.go.jp/j-home.htm>）をのぞいてみれば、



日本の学術行政の重要な一環である研究補助金制度の本来あるべき姿を検討するために若干は参考になろうし、また掲載されている前文部次官氏の理事長就任のあいさつなどから、官僚の作文の典型のような退屈で形骸化した日本語の文体を、鬼門ならぬ虎ノ門のかどに立つ文部省がこれまで推進してきた「国語教育」の内容をふくめて、日本の教育と学術に課してきた多すぎる制約と管理のありかたとの歴史上の関連を考慮しながら鑑賞するのも有意義であるかもしれない。